

黒ノリ色落ち緊急対策事業Ⅱ

黒ノリ養殖支援

岩出将英・高崎有美子

目的

本県の黒ノリ養殖業では、生産者に対して養殖環境についての情報提供や病害等の対策を指導するなど、きめ細かな対応が求められている。

本事業では、漁期中にノリ漁場栄養塩調査及びプランクトン調査を実施し、その結果を迅速に生産者へ発信するとともに、その後の対応策等についての情報を提供することで黒ノリ養殖生産の安定化を図ることを目的とする。

方法

1 今漁期の気象の特徴について

気温、降水量は、津地方気象台が発表した津市のデータをを用いた。

2 今漁期の海況の特徴について

水温は鈴鹿市白子港(午前10時)の定時観測データ、栄養塩及び植物プランクトン発生量は三重県ノリ漁場栄養塩調査のデータを用いた。

3 共販結果について

三重県漁業協同組合連合会発表の令和6年度共販結果データを用いた。

4 ノリ芽検診・病害診断等の養殖指導

漁期中において生産者から送付、持ち込みされたノリ網や葉状体サンプルについて病害診断等の養殖管理にかかる指導支援を実施した。

結果及び考察

1 今漁期の気象の特徴について

図1に今漁期(令和6年10月から令和7年3月)と平年(平成3年から令和2年までの過去30年平均)の気象(気温・降水量)の動向を示した。気温は、1月下旬にかけて概ね平年並みから高めで推移し、2月は平年より低めで推移した。降水量は、11月下旬にかけて断続的な降雨があったものの、12月上旬から2月下旬にかけては、平年よりも降水量が少なかった。特に12月は記録的な少雨となった。漁期終盤の3月は平年並みに降雨があった。

2 今漁期の海況の特徴について

今漁期の水温(図2)及び桑名地区を除くDIN量と珪藻プランクトン密度(図3)の推移を示した。水温は、12月上旬にかけて概ね平年より高めで推移したが、年明け以降は一転して低めで推移した。11月上旬まで比較的高い珪藻プランクトン密度が続いていたにもかかわらず、DIN量は12月中旬にかけて平均70 $\mu\text{g/L}$ 以上を維持した。これは、10月から11月下旬にかけての、まとまった降雨によって栄養塩の供給が維持されたものと考えられた。一方、年明けからは降水量が少なく、1月下旬から2月上旬にかけて珪藻プランクトンが増殖し、DINは減少した。令和6年度漁期にノリ漁場で発生した珪藻プランクトンの優占種は、スケルトネマ属とキートケロス属だった。

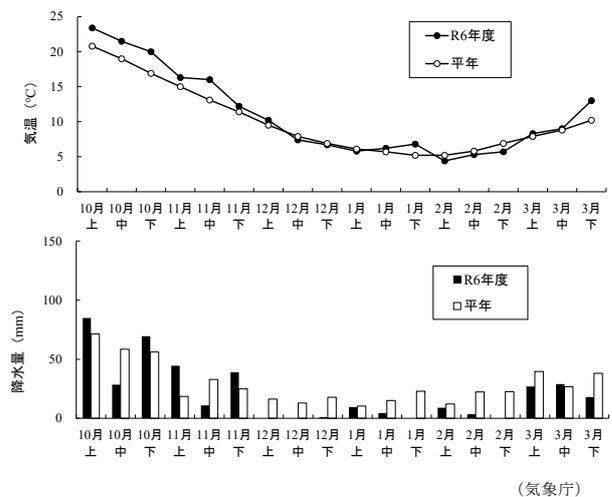


図1. 今漁期の気象動向(上:気温,下:降水量)

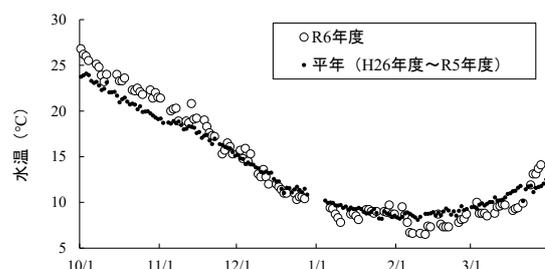


図2. 今漁期の水温動向

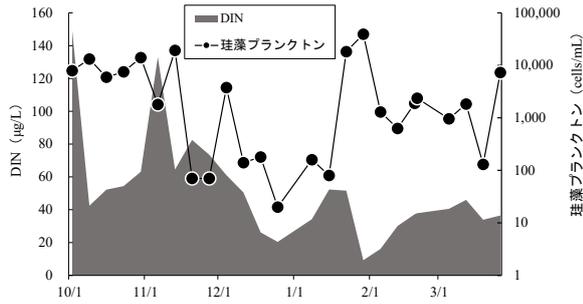


図3. 今漁期のDIN量と珪藻プランクトン発生量

3 共販結果について

令和6年度漁期の生産枚数は1億4,870万枚（前年度比120%）、生産金額は36億8,600万円（前年度比155%）であった。平均単価（枚）は、24.8円（前年度比129%）であった。

共販汐回別の生産枚数と平均単価について図4に示した。単価は、主要生産県の不作により、漁期通じて高値で推移した。

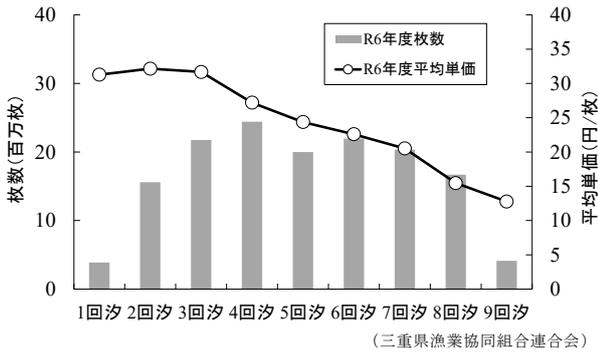


図4. 汐回別生産枚数と単価の推移

4 ノリ芽検診・病害診断等の養殖指導

漁期中に県内漁場の栄養塩動向調査及びプランクトン発生調査を合計25回実施し、生産者及び関係部署あて情報提供を行った。また、生産者の要望によりノリ芽検診及び病害診断を随時実施し養殖管理にかかる指導支援を実施した。ノリ病障害については、育苗開始から10日前後を目安に実施されたノリ芽検診において、附着珪藻（タビュラリア）や干出過多に因ると考えられる形態異常が散見されたが、概ね健全度の高い種網が確保された。養殖期序盤から中盤にかけて、北勢地区から南勢地区にかけて、カモ類（主にヒドリガモ）による食害と思われる葉体短縮が発生した。一方魚類（主にクロダイ）による食害の報告は少なかった。養殖期終盤に、あかぐされ病の発生が確認されたものの、生産には大きな影響が出なかった。